

〔論文〕

佐々木指月の詩作と禅までの距離

——詩集『郷愁』の成立と同時代評を中心に

堀まどか

HORI Madoka

はじめに——越境する禅者・佐々木指月の文芸——

本稿は、2023年3月5日に開催された第一回「文学と宗教」研究会「アメリカにおける越境者の文学——仏教との関わりから考える」（南山宗教文化研究所後援）における筆者の報告「佐々木指月の宗教と文学の距離——禅、詩、ナンセンス随筆」の内容をもとに、再構成・加筆したものである。発表時には、佐々木指月の宗教と文学について、詩やナンセンス随筆の傾向を含めた執筆活動全体を総括的に報告したが、本稿では彼の初期の文筆活動である詩作、とくに文芸雑誌『国民文学』への寄稿とその一部をもとに編まれた詩集「郷愁」（1916）に話題を絞って、その同時代評価と傾向とをまとめる。

佐々木指月（1882-1945）は、1930年にニューヨークに米国第一禅堂を創設し、その後のアメリカや西欧社会における禅ブームに影響を与えた先駆者である。アメリカでは、禅者として曹溪庵（Sokei-an）の名で知られている。「彫刻家」⇒文芸家（詩人・随筆家）⇒「禅の布教者」と、多面的な顔を持ちながら活躍し、アメリカと母国日本を行き来した文化人である。彼の禅僧としての特異な経歴については、これまでも日本内外で折に触れて語られており、多少は知られている存在である¹。だが彼の文芸や詩に関する研

1. 日本では、大室晃「佐々木指月」（『市原地方史研究』9号、1978年、117-161頁）、堀岡弥寿子「佐々木指月の生涯（上・下）」（『禅文化』87号、88号、1977年12月、1978年3月）、堀正広「ニューヨークの禅者・曹溪庵佐々木指月——海を渡った放浪の禅者」（『禅』2001年、2002年）、野本一平「ニューヨーク禅のはしり」（『重米利加日系崎人伝』弥生書房、1990年12月、113-128頁）があり、アメリカでは、マイケル・ホッツ編の *Holding the Lotus to the Rock: Autobiography of Sokei-an, America's First Zen Master*（The First Zen Institute of America, 2002, pp.1-259.）などがある。

究やその時代のなかの位置付けに関する評価は、日本においてもアメリカにおいても全く行われていない。

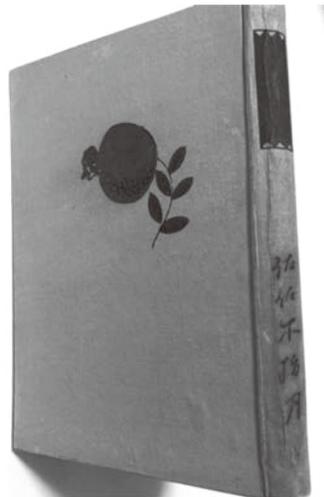
近代を代表する歌人で国文学者であった窪田空穂(1877-1967)は、晩年(1958年当時)、指月の文芸と人柄について次のように語っている。

佐々木指月という名は、私には甚だ親しく、忘れ難い名となつてはいるが、しかし我が国内では、三四、四五の人を除いては、殆んど誰も知らない名であろう。聞いたような名だと、記憶の片隅にその名を留めていられる人があるとすると、『弗の女人像』、『アメリカ夜話』と題する菊版半截の小冊子で、サンフランシスコの市民生活の實態とその裏通りを興味ゆたかに、印象的に描寫してあるのを讀んで、なお忘れ去らずにいる人で、ああ、あの本の著者かと思ひ出し得る極めて少數の人に過ぎないであろう。私の知つてはいる限りで、佐々木指月をはつきり記憶しているのは村松梢風君だけで、同君は指月の特殊な文藝的才分とその視野の廣さを認めている人である。他に詩集『郷愁』があるが、この書は記憶している人があるか何うかも危まれる²。

空穂は、学生時代からの佐々木指月の親友であり、1910年代に異国で日本語の詩人となろうとしていた指月への助力を惜しまなかった人である。ここで空穂が《サンフランシスコの市民生活の實態と》といっているのは、ニューヨークの間違いである。指月は



内扉



装丁

2. 窪田空穂「佐々木指月という人——思い出す作家達5」『短歌研究』15(6)、1958年、136頁。(再録／「佐々木指月」『窪田空穂全集』11巻、1965年3月、222頁。)

サンフランシスコやシアトルにも滞在し、『國民文學』に寄稿し始めたころは西海岸にいたが、その後の彼の随筆の多くはニューヨークを描いたものである。空穂が言及した詩集『郷愁』とは、どのようなものだったのだろうか。

1 佐々木指月について

1-1 文芸に関する概説

まず初めに、佐々木指月の文芸の特性とそれらが発表された場所について確認しておきたい。彼が文芸を発表した土壌は主に三つわけられ、①西欧文学の傾向を受容しながら次々と変化していた近代日本の詩壇や文芸空間、②アメリカに渡った移民たちの日系アメリカ人コミュニティのなかの文芸空間、そして③多国籍的ボヘミアン芸術家たちが集って前衛的芸術運動が盛んとなっていたニューヨークの文芸空間がある。本稿で扱うのは、この①のうちの、ごく初期にあたる時期である。

作家・文芸家としての指月は、1910年代にはアメリカから日本へ詩を書き送っており、『國民文學』で定期的に掲載され、これが友人や文芸家たちの間で評価されていく。本稿で注目する詩集『郷愁』は、指月の文芸活動の最も早い時期のものである。この後には、1920年代の日本文壇では雑誌『中央公論』をはじめとして数多くの雑誌に寄稿し、「アメリカもの」の随筆家として精力的に執筆していく。刊行本としては、『米國を放浪して』（1921年7月）、『金と女から見た米國及米國人』（1921年11月）、『亜米利加夜話』（1922年1月）、『さらば日本よ』（1922年11月）、『詩集・言葉の鳥籠』（1922年10月）。そして二度目の渡米を経て、『女難文化の國から』（1927年3月）、『弗の女身像』（1928年5月）、『変態魔街考』（1928年5月）を刊行して、人気を博した。しかし1928年には、禪布教に専念するために三度目の渡米をしてニューヨークに定着し、それ以降は日本の雑誌にはほとんど寄稿しなくなっている。1930年代以降には、英語での經典の翻訳や英語での仏教講話が彼の生活のなかで重要な位置を占めていた。ただ、この30年代以降も、アメリカの邦字新聞紙上を中心にして執筆を求められて定期的に随筆の寄稿を続けており、アメリカ各地の読者から慕われ愛されている。この時期になると、佐々木指月個人での刊行本は出していないが、日系文芸人たちのアンソロジーである山崎一心編纂の『アメリカ文藝集』の1930年版には、「序にかえて」と短編小説2篇³が、1937年版には「序」と短編小説4篇が、それぞれ巻頭に掲載されており、ニューヨークに居ながら移民地文芸のなかで地位を確立していた様子がわかる。この時期に邦字新聞に掲載した膨大な寄稿記事をまとめて書籍刊行する話もまとまっていたが、真珠湾攻撃以降の日米の戦争の時代に入って実現はしなかった。

3. ただし、この2篇は『弗の女身像』からの再録。

要するに、佐々木指月という作家は、日本文壇においてもそれなりの評価と人気を得ていたことに加えて、アメリカの日系コミュニティ文壇のなかでも文筆家・批評家として一定の地位と評価を得ていた。そして、日本語の作品のみならず彼の英語による著述や講話も、今日の日本の人々が想像する以上に細々と脈々と時代を超えてアメリカの弟子達に愛されてきたという事実がある。つまり彼の①の側面は勿論のこと、②③における彼の活躍については従来全く注目されていなかった。

彼の文芸をジャンルとして分けると、(A) 彫刻の代わりに精力を傾けて取り組んだ詩作と、(B) 風俗描写や文化論の随筆や小説を含む散文、そして(C) 禅を伝える言葉(講演、翻訳など)に分けることができるだろう。この(B)は、アメリカの「金」と「女」の社会的実情——これは人間世界の「煩惱」と赤裸々な人間存在を描いているともいえるが——を面白おかしく切なく書いた「アメリカもの」の一連のエッセイがある。また指月本人が「ナンセンス文学」と呼んでいた風刺随筆なども含まれる。この場合、禅者としての「ナンセンス」の意味や、『不思議の国のアリス』を愛していた指月にとっての「ナンセンス文学」の定義やジャンル範囲にも注意しなければならない。そして(C)の「禅を伝える言葉」の範囲には(A)(B)ともに包括される。つまり、本稿ではそこまで全体的な傾向を証明できないが、彼の文芸のすべてが彼なりの「禅」の要素や精神を伝えるものだったといえる。

指月の(A)の文体は、日本語の美しさを追求して書かれている。日本詩壇の傾向としては口語自由詩に向かっていく時代であったが、アメリカから書き送られた指月の詩の文体は、日本の旧来からの詩語や文語をつかった様式であった。ただし(B)の文体になると、英語表現をそのままカタカナで表した独特の新しいスタイルを持ち、また落語や講談風のリズム感をもった巧みな文章であった。痛快でコミカルな書きぶりは、笑いと涙を誘って読者を魅了するものである。そして、その執筆の根底にあるものは「禅」への深い情熱であり、それを支えるのが、モノの美を掴み取る芸術家ならではの鋭い観察眼である。1920年代後半には「近代文明が生んだ唯一の随筆詩人だ」と評されたこともある⁴。また田中貢太郎、村松梢風二氏と並んで『中央公論』の「三羽鳥」の一人とも評されて、その中でも最も斬新な一人とみなされていた⁵。

さて本論では以上のような背景を前提としつつ、(A)の佐々木指月の詩作について扱う。彼が刊行した詩集としては『郷愁』(1916年)と『言葉の鳥籠』(1922年)があるのだが、とくに彼の文筆活動の初期の、つまり雑誌『国民文学』に発表していた時代

4. 香取彪夫「随筆詩人佐々木指月」『文藝：純粋文藝雑誌』5(10)、文藝社、1927年、40-41頁。

5. 《田中貢太郎、村松梢風二氏と並んで、一時、『中公』の讀物では、三羽鳥の一人に数へられた指月氏は、確かに獨有の才氣と輕快な筆致とを有してゐた。或意味で、氏のものが一番垢抜けしてをつたとさへ云へよう。》(高須芳次郎『名文鑑賞読本・大正時代』厚生閣、1937年、272頁。)

の、「禪」の体現として取り組んだ詩作について、同時代の傾向も踏まえながら論じる。

1-2 佐々木指月が詩作をはじめまで

つぎに、佐々木指月が詩を書き始めるまでの経緯を概説しておきたい。1882（明治15）年3月10日に生まれた佐々木栄多は、14歳の時に神官だった父をなくして、東京の仏具屋に弟子入りしている。1902年に東京美術学校彫刻科に入学して高村光雲（1852-1934）⁶に学ぶ。その頃、光雲の息子・高村光太郎（1883-1956）の紹介で窪田空穂との交友が始まり、また空穂の紹介によって、東京日暮里の禅堂・両忘庵（両忘協会）に通うようになった。そこで指月という名——「月を指せば指を認む」（『楞嚴経』）に由来する——をもらう。

両忘庵は、鎌倉円覚寺管長积宗演の法嗣・积宗活（1871-1954）⁷が再興した禅の修行道場であった。そこは出家せずに実社会のなかで活躍しながら禅を修行する居士禅（在家の修行者のための禅）の道場で、当時は、数多くの知的な若い学生たちや芸術家たちが集っていた。平塚らいてう等の日本女子大学の女性たちの修行者も少なくなかった。（指月の妻となる女性も日本女子大学の学生である。）指月は、禅に熱中するあまり東京美術学校を2年留年したほどである。

佐々木指月は卒業直後の1905（明治38）年5月に補助輸卒兵として日露戦争に従軍し、翌1906年3月に帰国する⁸。そして同年9月に积宗活やその弟子たちと共に禅の布教のためにアメリカに渡った。渡米にあたり、師の勧めもあって同じ禅の同志で渡米を希望していた女性・とめと結婚。一行はシアトルに到着したのちにサンフランシスコに向かい、积宗活の発案で、カリフォルニア州ハイワードに農業のための土地を購入する。彼らは農作業をおこなって生活基盤をたてながら、禅の修行と布教活動を行おうと考えたのである。指月は農作業の継続に反対して、一時期は积宗活ら一行から離れて⁹、サンフ

6. 1889年から東京美術学校の木彫科の教授となる高村光雲は、佐々木指月と同じく幼少期に仏師として木彫を学び始めた人物である。高村光雲の時代はもちろんだが、佐々木指月にとっても「芸術」「美術」「職人」の概念が近代的に確立しきれていなかった時代であり、社会的地位や意識のうえで苦労や困難が大きかったと考えられる。

7. 积宗活は、円覚寺の今北洪川から积宗演に学び、若くして法嗣となった優秀な禅僧であった。

8. この従軍のころの記憶は、詩集『郷愁』の詩篇「饅頭」にうたわれている。「饅頭」夢はさめても饅頭は／ふつくらとふくれりて／ほんのりと白い烟を立ててある／ああ出来たての饅頭の／その觸覚に氣を取られ／馬の尻をば叩くをも／忘れてしばし佇みし／我こそ輻重輪卒なれ。／／實に十年の後までも夢に見る程／腦髓に泌みこみたる／満洲の、法庫門の饅頭。／1915年10月（『饅頭』『郷愁』国民文学者、1916年6月5日、129-131頁。）

9. 結局、积宗活らの素人農業はうまくいかず、ハイワードでの農業をしながらの禅布教は挫折した。积宗活らはサンフランシスコのサター・ストリートに新しく禅センターを開くことになり、指月は師に謝罪し和解している。

ランシスコの芸術大学でリチャード・パーティントン (Richard Partington : 1868-1929) から絵画を学ぶ。しかし、人種差別があったことに加えて画材やアトリエ確保などのお金がかかった。そのため、妻子を養いながら芸術と禅をこころざす指月は、紙と鉛筆で可能な詩作に転向して没頭するようになっていく。彼自身が次のように回想している。

繪畫には晝間の時間を要するし、彫刻をやるには、廣い部屋と高價な材料を用ひなければならぬ。その時間と金とは、私はほんとに毎日のやうに泣く思ひをした。

詩を命としはじめたのはその頃からだつた。一枚の紙と一本の萬年筆と、ベッドの隅でもどこでもいい。晝でも夜でもそんなことは係はない。モデルは一時間にいくらの値段を拂ふ用もなく、天地のなかのものは、外界でも、内界でも、また内外のあひだでも、現象即實在の世界はみんな詩のなかにはひつて來た。尤も私はその前から詩にしたしんではゐたものゝ、いよいよこれを自分が選んだ最上の藝術とさだめて、それに自分の生活を奉じようと覺悟した私の胸はうれしかつた。私は彫刻や繪畫の前に跪いたと同じ敬虔の念を抱いて、その道に進んだ¹⁰。

指月が詩を発表し始めたのは、従来知られていたよりも早い時期である。管見の限りだが1908年9月27日の日系新聞『新世界／The New World』の第一面に「雲」という詩が掲載されているのが、指月の名前で詩が掲載されたものとしては最も早い。また1909年ごろからはシアトルで文学活動を始め、つまり1910年前後のシアトル移民地文芸の形成期に現れたなかの一人であった。従来には1914年の『國民文學』寄稿以降が知られていたが、それ以前から詩作を始めていたのである。

釈宗活一行のサンフランシスコでの禅の布教活動はうまくいかなかった。釈宗活ら一行は、みな1910年には日本に帰国している。だが指月夫妻は、釈宗活からアメリカ布教の願いを託されてアメリカにとどまった。1911(明治44)年、指月はアメリカ西部を放浪。彫刻や絵画を売って、また日系人のための新聞にコラムを担当しながら生活費を稼ぐ。妻にとっても移民地生活はさぞかし大変であつただろうと想像される。1910年に長男、1912年に長女が生まれ、一家でシアトルで暮らした。

家族を養いながら禅と芸術を志す移民地において、1914(大正3)年、指月は学生時代からの友人の窪田空穂が雑誌『國民文學』を創刊したことを知り、シアトルから詩を送りはじめる。空穂が最初に詩稿を受け取ったのは1915年1月であつたという。「明治

10. 佐々木指月『亞米利加夜話』、2-3頁。

より大正へかけて、海外へ漂泊してある一日本人の心の記録として、これらの詩を讀んでくれ」という意味の手紙が添えてあった¹¹。空穂はその当時の経緯を次のように回想している。

書信は絶えずあつたアメリカの佐々木指月に贈つてやると、彼は入会すると云つて、何人分にか当る会費と、原稿として詩(新体詩と呼んでいた)を送つて来た。私は指月の詩なる物を初めて眼にした。詩だけではなく、短歌一首でも、苟も作品と称している物は、曾て見たことがなかつたのである。したがつて、危惧の念を抱いて、余り不味いと困るがなあと思つて讀んだのであつたが、読み終ると驚嘆した。案外にも佳い物だつたのである。

一と口に云うと、純粹な、詩情の裕かな、一抹の哀感の伴なつたものであつた。殊に私を魅した点は、ゆつたりと落ちついてはいるが、割り切つてははず、起伏緩急をもつた聯の連ね方であつた。伏と云い緩と云うべき遊びに類した聯は、自然な、態とではない対句を用いていて、巧いなあと感心させ、読み返させるのであつた。表現形式は、当時流行していた七五調で、四行一聯であつた¹²。

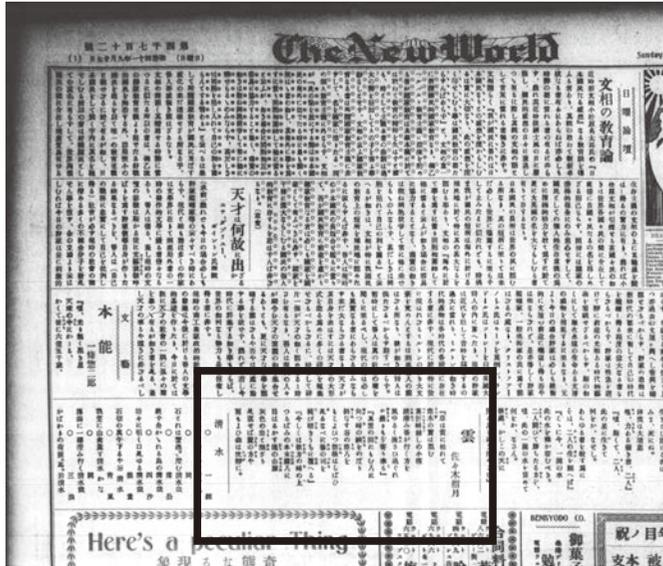
こうして指月の詩作品が、日本の文芸雑誌『國民文學』1巻8号の1915年3月から継続して掲載されるようになる。さらに1916年、指月は窪田空穂にアメリカから出版費用を送り、詩集『郷愁』を同年6月に刊行する。

家族を抱えての移民地生活は厳しかったが、芸術家としての夢もとどまるところがなかったのだろう。三人目の子を宿した妻と二人の幼子を日本に帰国させたのち、1916年10月、単身ニューヨークへ移動している。ニューヨークではモダニズムの坩堝であつたグリニッジヴィレッジに住んで、家具修理や彫刻工の仕事をみつけて生計をたてながら、詩人や芸術家、音楽家たちとつきあうことになる。1916年暮れから一時期はイギリスのオカルティストのアレイスター・クローリー(Aleister Crowley: 1875-1947)から若い詩人として可愛がられたり、1917年半ばにはグリニッジヴィレッジのボヘミアン王と称されるマックスウェル・ボーデンハイム(Maxwell Bodenheim: 1892-1954)との連名で文芸雑誌『リトル・レビュー』に李白の詩の英訳を掲載するなど、ニューヨークでも多少の文学活動を行っている。そして本稿の最後にも記すが、他の日本人画家とともに芸術家としての挑戦を試みたこともある。彼は国籍を問わず仲間や周辺の友人らからは敬愛されて、常連のカフェなどでも一目置かれる存在であつた。だが、本

11. 窪田空穂「序」『郷愁』前掲、13-14頁。

12. 窪田空穂「佐々木指月という人〈続〉」『短歌研究』15(8)、1958年、31頁。

人自身は人生における本質的不安も抱えており、師や家族に会いたいと考えていた。1919年10月、突然にニューヨークを離れて禅の修行のために日本に帰国した。(本稿では、彼の人生のここまでの経緯までを記すものとする。)



佐々木指月「雲」『新世界／The New World』(1908年9月27日版第一面)

2 雑誌『國民文學』と、1910年代前後の日本詩壇

2-1 雑誌『國民文學』

次に、窪田空穂が主幹をして創刊された『國民文學』と、その時代の詩壇の傾向についてみておきたい。『國民文學』への寄稿は、佐々木指月が日本の文壇や出版界と関連を持ち始める契機であった。

窪田空穂は近代を代表する歌人の一人であるが、国文学研究、とくに和歌文学研究に功績を残した文化人としても知られる。また、記者としても編集者としても実力を発揮した人物で¹³、東京専門学校在学中の1902年から同人雑誌『山比古』(1904年廃刊)を創刊していた。指月と空穂は互いに学生同志であった頃からの友人であった。指月の話術

13. 窪田空穂は28歳から41歳ごろまで新聞社や出版社で記者・編集などをしながら、一方で国語や英語を教えていた。1920年4月、44歳からは坪内逍遙の推薦によって、早稲田大学文学部国文科で専任講師として着任している。(田渕句美子『窪田空穂「評釈」の可能性』岩波書店、2021年6月16日。)

や講談風の語りはその頃から友人らのあいだでも一目置かれていたことは窪田空穂が回想している。指月自身は芸大で彫刻科に在籍しながら禅に没頭していたが、空穂の文芸雑誌も読んで、詩や文芸も愛好していたと考えられる。

『國民文學』は、1914年6月に窪田空穂が中心となって創刊された月刊雑誌である。創刊号には次のような刊行の意趣が記されている。

我が國の文藝、美術をして、より強い國民的光輝を帯びたるものとならせたいといふ願ひは、我等も多くの人と同じく抱いてゐる。「國民文學」は此の願ひを願ひとしてゐる。さうした文藝、美術の芽生えて生長して行く爲に、土壤を耕す一つのものとなりたい、雑草をぬくものとなりたいと思つてゐる。土壤を豊かにするといふだけでも、其所には數へ難いまでの多くの問題を含んでゐる。我等はその營養を横に廣くもとめなければならぬと同時に、縦に古くもとめることを忘れてはならない。我等は一切の土臺であるところの此の國土を何時も念としようと思つてゐる¹⁴。

創刊号は、田山花袋による二葉亭四迷論、藤懸静也による浮世絵の来歴、半田良平によるトルストイ論、前田晁による西鶴論、徳田秋声による新興演劇界への評論など、勢力のある文芸家たちが寄稿している。そして、窪田空穂自身は「清少納言論」と故郷信濃を描いた小説風隨筆「破滅に向かいつつある農村」の二本を書いている。その他、「石水」の号で¹⁵「最近の日本画界」と題した評論も掲載された。口絵にも、菱川師宣や円山応挙などの近世の絵画が掲載され、国際性を意識しつつ「國民的光輝」を探っている様子が垣間みられる。

創刊号の後も、長谷川天溪、岩野泡鳴、中村星湖、島村抱月、内田魯庵、萩原井泉水、吉江孤雁、小杉未醒、北原白秋などといった当時活躍していた文化人・文芸家らの寄稿が続いている。会費は毎月50銭で¹⁶、投稿募集があり、詩は三木露風、短歌は窪田空穂、俳句は上田龍耳、矢崎奇峯が投稿の選者であった。

文芸と美術の融合した文化雑誌で執筆するということは、彫刻や油絵を学んだうで詩に移行しようとしていた指月にとっては大きな魅力であったに違いない。佐々木指月は、この雑誌に1915年3月号から1917年2月号まで寄稿している¹⁷。母国を離れてア

14. 「發刊の辞」『國民文學』創刊号、1914年6月。

15. これは、川喜田政昭(1822-1879)の号を受け継いでの川喜田半泥子(1878-1963)の執筆であろう。

16. 『國民文學』が配布されるのは、窪田空穂主宰の「十月會」の会員であり、創刊号の巻末に「十月會」の広告や月50銭であることなどが記されている。

17. 『國民文學』の編集は、1917年には窪田空穂らから松村英一に移っている。それ以降は次第に短歌雑誌の傾向が強くなっていった。空穂が編集を離れて以降、指月も寄稿しなくなったといえるだ

メロカに暮らす指月にとって、この雑誌からは同時代の日本文化界の動向を知ることができた。と同時に、アメリカの地から新しい日本文化の土壌を形成する一役を担いたいという気持ちもあっただろう。

そして、佐々木指月にとって「詩」に力を入れることは、単純に安上がりの芸術であるため、という以上のものがあつたと考えられる。というのは、彼は禅に全霊をかけて生活をする居士であり、また同時にアメリカ西海岸で芸術的成功を試みる人間であつたからである。詩をこころざすことは必然であつたに違いない。なぜか。次に、その当時の日本詩壇がどのような傾向をもつていたのかについて見ていこう。

2-2 当時の日本詩壇の傾向と、野口米次郎の鎌倉円覚寺との関わり

禅の布教のためにアメリカ西海岸に渡つた佐々木指月が詩を書くことを意識した背景には、英米で評価された詩人・野口米次郎（1875-1947）の存在が強く影響してはたらずである。

19世紀末に渡米した野口米次郎は、サンフランシスコの対岸オークランドのミラーの「丘」(The Heights)で英詩を書き始めて、1896年に第一詩集*Seen and Unseen*を刊行して注目されている。1899年にはニューヨークに移動して女性視点の日記風ジャポニズム小説を書いて人気を博して資金を得て、1903年にロンドンで*From the Eastern Sea*を自費出版して注目を浴びる。同時代の著名な英米文化人らから好評をうけて一躍有名になつた野口は、1904年9月に日本に帰国して、一時期は鎌倉円覚寺に住んだ。1904年前後には野口に憧れて詩人になりたい日本の若者たちがミラーの「丘」を目指すようになっていた。積宗活らが1906年秋に農地を購入したヘイワードは、ミラーの「丘」のあるオークランドから僅か南に20キロほどで、同じサンフランシスコ湾岸沿いにあつた。

野口が帰朝した1904当時の日本文壇は、象徴主義文学運動の移入の時期にあたる。野口は蒲原有明や岩野泡鳴や上田敏らと親しくして、日本の同時代の詩人たちに深い感化を与えた¹⁸。また、1906年ごろには、日・英・米の詩人たちをつなげる「あやめ会」という国際的詩人グループを作ろうと企画して新聞紙上を賑わせてもいた¹⁹。同じ頃、野口は慶應義塾大学文学部に新設された英文科の主任教授となり、英文学や英米文学史を講じはじめてもいる。この1906年ごろから、彼は鎌倉の円覚寺蔵六庵に書斎をかまえて、大学で週に一度の講義を行う以外は、そこで英語での執筆活動を行った。円覚寺

ろう。

18. これについては、拙著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012年2月）5章「日本の象徴主義移入期と芭蕉再評価」に詳述したことがある。

19. あやめ会の成立と、日本詩人たちの抗争、出版と挫折については、拙著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（5章3節、113-121頁）に詳述。

時代に執筆されたものとして、詩集 *Pilgrimage* (1909) や随筆集の *Kamakura* (1910)、*Through the Torii* (1914) がある。

円覚寺という場所が重要である。円覚寺管長の釈宗演は禅の修行をすると同時に、1887年には慶應義塾で福澤諭吉に英語を学んで、国際性を意識していた人物である²⁰。福澤が新時代の仏教僧侶の社会的役割を革新的に論説していたこともあり、慶應義塾には宗派を超えて多くの僧侶や寺族が入学していた²¹。そして宗演は1893年のシカゴ万国宗教会議に参加している。シカゴ万国宗教会議のあとに、東洋の宗教に関心をもつアメリカ人が増えていったことが知られている。インドのヴィヴェカーナンダやダルマパーラが人気を博したことが有名であるが、日本の禅仏教に対しても関心がうまればじめていた。シカゴのポールケーラスが鈴木大拙を助手にして刊行物を出していく。また、アメリカ西海岸からはサンフランシスコの実業家アレクサンダー・ラッセルの妻アイダ (Ida Evelyn Russell: 1857-1917) とその友人らが1902年に円覚寺を訪れて、円覚寺内の正伝庵に滞在しながら釈宗演に参禅した²²。その後1905年には、釈宗演が一時期サンフランシスコの彼女の邸宅に招かれて仏教の講義をしている。(宗演との縁に導かれて、あるいは宗演に命を受けて、アメリカで禅仏教を説く道を引き受けたのが鈴木大拙、千崎如幻²³、釈宗活とその弟子たちであり、佐々木指月もその一人なのである。)

野口米次郎が18歳で最初に渡米したのは、シカゴ万国宗教会議が行われた直後の1893年秋である。野口も禅仏教に縁のある家系であり、早くから禅に関心を持っていた。彼の母方の伯父、漢詩人かつ僧侶であった釈大俊こと鶴飼大俊 (1846-1878) は、1874年からは曹洞宗の禅僧たちと仏教書林明教を創立して、仏教新聞『明教新誌』を発刊していた人物である。その関係で米次郎も渡米前には浄土宗大本山・増上寺の通元院に寄寓していたこともあり²⁴、慶應義塾に通っているころにも、英文学を乱読すると同時に

20. 釈宗演は1887年からスリランカのセイロンで3年学び、その滞在時に神智学協会を設立したヘンリー・スティーヴン・オルコットの *A Buddhist Catechism* (『仏教問答』) に出遭って読み込んでいる。仏教の重要性を説くこの『仏教問答』が日本で最初に翻訳されたのは1886年。日本の宗教家たちは、西洋人がようやく東洋の事情に通じてきて、仏教の志が理解されて世界に広がる機運が生まれていると喜んでいて、福澤諭吉もその機運を歓迎している一人であった。

21. 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』現代史料出版、2001年、36頁。

22. アイダ・ラッセルに関しては、Brian Riggs & Hidemi Riggs, *House of Silent Light: The Dawning of Zen in Gilded Age America* (The Buddhist Society Trust, 2023) が出ている。

23. 千崎如幻については、末村正代による「千崎如幻の前半生と北米開教——一九三〇年代以前を中心に」(『近代仏教』2023年5月)、「千崎如幻の後半生と欧米人來日禅修行—円福寺 Zen Hospice の設立と三宝教団修行ルートの確立」(『南山宗教文化研究所研究所報』2023年10月)が詳しい。

24. 大俊は、幕末期の英雄として知られた雲井龍雄の盟友であり、彼が33歳で逝去した時に死に水をとったのは鎌倉の光明寺(浄土宗大本山)の住職・武田芳淳である。米次郎の一つ上の兄・鶴次郎は、1904年より鎌倉光明寺の末寺である常光寺(現在の藤沢市)の住職をしている。野口米次郎は、

俳句や禅に興味を持っていた。福澤諭吉に激励されて渡米してミラーの「丘」に住み始めたときにも、宋朝・曹洞宗の代表的禅僧の宏智正覚（1091-1157）と、松尾芭蕉の句集を所持していた。宏智禅師の語録は、明治期には複数出版されていた。

野口は1904年夏に帰国する直前、アメリカ人から帰朝の目的は何かと問われて、「涅槃」the Nirvanaを得るために米国を去ると返答したという²⁵。アメリカにおける日本の仏教への関心や日本の宗教文化への注目ぶりを体感し、それを十分に意識して帰国したのが野口米次郎だったといえる²⁶。

帰朝した野口は、鎌倉円覚寺で一人静かな時間を確保し、世界に向かって英語での執筆活動に励んだ。(すくなくともそのデモンストレーションは成功をおさめた。)[「神秘的」と受け取られていた日本の事物に関する日本人による英語での執筆が、次々と円覚寺内で生み出された。既に東洋的・日本的な事物として欧米読者に認識されているモチーフをあえて用いて、従来の欧米人日本紹介者の言説をのりこえようとしていた野口の意図が、これら一連の著作には色濃い。

詩人・野口米次郎の多岐にわたる英文執筆のうち、もっとも重要なテーマが日本詩歌の神秘性・哲学性の紹介だったが、とりわけ鎌倉の円覚寺蔵六庵で執筆された英詩集 *The Pilgrimage* (1909)²⁷ は、英詩集 *From the Eastern Sea* (1903) と並んで、当時の欧米の文壇では高い評価を受けていた²⁸。日本国内でも1911年、オックスフォード大学に三年間留学して帰国したばかりの内ヶ崎作三郎が《野口米^マ二郎君の新著「巡禮」は中々な評判である。(中略) この一卷の英詩集の仲に日本固有の情調が顕はれてゐるので好評賸々である。兎に角野口君の英詩は日本を世界に紹介するに就いては一種の力となつてゐることを日本の文壇が認めねばならぬ》²⁹ と国外の人気を伝えている。この野口の

鎌倉や寺社に深い縁やつながりがあった。(これについては、拙著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』や『野口米次郎と「神秘」なる日本』に詳述。)

25. 野口は「日光の自然美と人工美」(『解放』1919年7月、115頁)のなかで、このアメリカ人記者との応酬について語っている。(『野口米次郎と「神秘」なる日本』第二章(74-75頁)に詳述した。)

26. 帰朝後に円覚寺に参禅した作家としては、夏目漱石も思い出されるが、漱石の場合はごく短期間であった。漱石は1894年末頃に円覚寺に参禅している。

27. *The Pilgrimage* は鎌倉のヴァレイ・プレスと横浜のケリー&ワルシュから出版されている。ヴァレイ・プレス社は、野口自身が手掛けていた出版社・版元・書籍輸出などを行う経営組織である。

28. 同著は1912年にはニューヨークのミッチェル・ケナレイやロンドンのエルキン・マシュー社からも再版された。この詩集には、W・M・ロセッティの「あとがき」が収録され、再版時にはランサムやトラウベルの批評も付録に付けられた。シカゴの詩雑誌『ポエトリ』の編集者たちも、『東海より』と『巡礼』を高く評価し、『They are books subtle, delicate lyrics, full of that strange blend of old Japan and the West of today which makes the poetry of contemporary Japan so intriguing』と推奨した。とくに『巡礼』の中の詩篇“Ghost of Abyss”の論評を行っている(Eunice Tietjens, “Yone Noguchi”, *The Poetry*, vol.15, Nov. 1919, p.97)。

29. 内ヶ崎作三郎『英國より祖國へ』北文館、1911年12月19日、213頁。

英詩集は、寺院を直接的に叙情的にうたったものや、禅仏教を意識したモチーフが目立っている。

野口の英語による禅仏教の執筆に関しては、*The Pilgrimage* の翌年に出された *Kamakura* でさらに細かい情報が語られた。そこでは集中的な坐禅修行である大接心や、日常的な禅の時間割などを説明し、叙情的で神秘的な雰囲気を描き出している³⁰。野口の *Kamakura* 以前にも、バジル・ホール・チェンバレン (B. H. Chamberlain : 1850-1935) やジョン・ラファージ (John LaFarge : 1835-1910) が大仏や鎌倉について語っていたのだが、野口はそれを意識しながらも 1909年、1910年により詳しい説明・解説を行って海外発信したのである。

野口が鎌倉で執筆に専念する様子はニューヨークでも報じられている。1911年2月16日付のニューヨークの新聞『ネイション』(*Nation*) には、円覚寺にこもる野口の生活の様子や意義が報告されている³¹。円覚寺にこもった野口は、沈黙に浸った生活の中で人間の知力の限界を知り「精神的な覚醒」を得たと語っている³²。円覚寺の体験は、禅者としての悟りではなかったかもしれないが、詩人としての覚醒をもたらした³³、円覚寺の建物や仏像や線香の煙、読経の神秘的な音律などを情景豊かに表現してみせたのであった³⁴。野口の日本への視線は、外国人が異文化を眺めているかのようであったが、日本の詩人として、日本の寺院の静けさや霊的な雰囲気を全身で感じ、その印象を英文

30. 例えば以下のようなものである。[It seemed to me that I was already led in a magic atmosphere under whose world-old incense -what a song of exclamation!— I lost all sense of time and place. Here the priests wrapped in silence appeared to my eyes as if they had returned a long time ago to the grey elements of nature which stand above Life and Death. And it is the very problem of Life and Death you have to solve with the Zen philosophy, if you like to call it philosophy.] Yone Noguchi, *Kamakura*, p.5.

31. S. Tsushima, “Yone Noguchi at Enkakuji”, *The Nation*, Feb.16, 1911, pp.163-164.

32. 同上。鎌倉円覚寺での「精神的な覚醒」は、カリフォルニアのミラーの丘で自然界との交感を得て覚醒したとき、ロンドンでブレイクやホイッスラーの芸術に接して覚醒したときに続いて、三回目だと語っていた。

33. 《私は確に圓覚寺の静かな雰囲気に触れて、私の表象主義の花を咲くに至つた》(野口米次郎「圓覚寺」『神秘の日本』第一書房、1926年4月、50頁。)

34. 英文随筆 *Kamakura* で記された内容は、のちに日本語に自己翻訳される。たとえば《境内に入つて最初人の目につく建物は、山門の後に立つて居つた佛殿であつた……この建物位私の好いたものはなかつた。十五六間平方の建物で、何とかいふ天子の勅額が懸つて居つた。床は苔蒸して青ずんだやうなタイルで敷きつめられて、思想の陰影が幽霊の如く拔足さし足で歩いてゐるやうに感ぜざるを得なかつた。堂中の中央に釋迦の佛像が立つて居つて、その前でたち上る線香の煙は、その姿を一層神聖化させて見せた。年に三四回この佛殿で、地中の僧侶全部が集り極めて音律的な讀経をする事があつたが、そのとき堂外へ溢れ出る僧侶の肉聲は、境内の樹木に響き渡つた。》(同前、52-53頁)と書いている。

で世界に向けて発表したのである。(このような野口の国外発信活動は、国内文壇と全く断絶した形で行われたわけではない。日本人作家の書籍を積極的に海外に売りこんでいた事実³⁵のほかにも、日本国内の現代詩人たちを海外に紹介する活動も自ら行っている³⁶。文芸家仲間の社交的会合や夕食会には主要メンバーとして参加しながら、日本詩壇のなかで異質な光を放って、大正期の周辺詩人らにさまざまな感化をあたえた³⁷。)

本稿では扱わないが、佐々木指月も野口米次郎の詩について高く評価し共感を寄せる長い講評を書いている³⁸。また佐々木指月のアメリカものの随筆のなかでも、米次郎の名前が「野口さん」として親しみ深く散見される。

野口米次郎は1900年代の日本の青少年たちにとって憧れの存在であった³⁹。当時の野

35. ヴァレイ・プレス社は、野口自身が手掛けていた出版社・版元・書籍輸出などを行う経営組織、自らの本を出版し、宣伝して、海外に輸出するというを主な事業としつつも、同時に岩野泡鳴や永井荷風、ラフカディオ・ハーンなどの日本の書籍を海外に輸出している。例えば、アメリカの書籍ディーラーと思われるジェームズ・カールトン・ヤング宛てに「Valley Press Publishing」と刻印された専用レシートで、4枚の請求書(1909年10月12日付)が送られている(カリフォルニア大学バークレー校バンククロフト図書館蔵)。この会社を通して輸出されていた書物は、岩野泡鳴の『闇の盃盤』、『耽溺』、『新自然主義』、『新体詩の作法』などや、永井荷風の『荷風集』、『アメリカ物語』、『冷笑』、そして野口米次郎本人の著作は、*Lafcadio Hearn in Japan, Pilgrimage, From Eastern Sea (English Edition), From the Eastern Sea (Japanese Edition), The American Diary, The American Letters, My Thirteen Years in England and America, Summer Cloud* 等があったことが残されたレシートからわかる。

36. たとえば「日本現代の詩人」と題して『ジャパン・タイムズ』に寄稿した評論の中で、島崎藤村、蒲原有明、前田林外、岩野泡鳴らを評論し、日本の立場から日本の新しい詩歌の潮流を国外に紹介しようとしている。このような野口の対外的活動を、同時代の日本詩人たちも認識していた。野口のあやめ会活動を攻撃することになる雑誌『白百合』の社告にも『ジャパン・タイムズ』寄稿の「日本現代の詩人」と題する野口の評論を一読するように推薦している(社告『白百合』2巻8号、1905年)。

37. 日米英の詩人組織あやめ会が挫折したのちの1907年以降も、野口は英語で国外向けに活動しながら、上田敏や蒲原有明らの集う会に参席している。象徴主義の詩歌を牽引した野口米次郎や蒲原の影響や感化のもとに、明治40年代に三木露風や北原白秋が登場し、白秋や高村光太郎などの影響を受けて萩原朔太郎が大正初年の詩壇に登場する。

38. これについては、拙稿「境界者の詩学と宗教——佐々木指月の雑誌『詩聖』のなかのヨネ・ノグチ評」(*Yone Noguchi Society Newsletter*, vol.8, Nov. 2022, pp.3-6.)に記した。

39. たとえば、1903年に渡米した木村秀雄(1879-1936)は、野口の足跡を追ってミラーの丘に直行している。彼はオークランドで、ハタ・ヨーガの導師ピエール・アーノルド・バーナードに遭い、心霊思想にのめり込み、日本で新興宗教の教祖になった(拙著『野口米次郎と「神秘」なる日本』五章)。また、のちにホイットマン研究者になる長沼重隆(1890-1982)は、野口に憧れて19歳で渡米。野口が師事したウォーキン・ミラーに会い、野口が歩いた街を何年も歩いた。彼は1913年頃にサンフランシスコの書店で野口の*The Pilgrimage*を発見して数年間肌身離さず愛読し、その中でホーレス・トラウベルの名を知る。長沼は野口の名に言及しながらトラウベル宛の手紙を書いて、ニューヨークに出てトラウベルと親交を結ぶことになる。長沼が野口に初めて会ったのは1920年1月の

口の存在が若者たちに与えた影響は大きく、とくに渡米を志すものや滞米中の日本人たちにとっては、野口の英米の新聞雑誌での活躍が目に入らなかったはずがなかった。佐々木指月も師の釈宗活も、少なくとも1906年に渡米する段階で、円覚寺に滞在する詩人野口米次郎の名前とその英米での活躍について見知っていたはずである。それゆえに、移民地でお金のかかる彫刻や油絵を続けられなかった頃の指月が詩人を志すには十分な必然性があったと考える。

3 『國民文學』への寄稿と、詩集刊行

さて、禪の布教のために釈宗活に同行してアメリカに渡った佐々木指月は、前述のように1908年には詩を書き始めて移民地の邦字新聞に掲載していた。釈宗活ら一行は、1910年に佐々木指月一家を残して永久帰国してしまう。指月は1911年には、生活費をかせぎながらアメリカ西部を放浪、カリフォルニアからオレゴン州を通してワシントン州までを歩く。また、このころシアトルの日系新聞『大北日報』(*The Great Northern Daily News*)に「ナンセンス」のコラム連載を始めており、移民地文学の創出を模索するシアトル文壇との関わりをもっていた。そのような中で1914年から日本の雑誌『國民文學』に詩を送りはじめて、詩作に没頭してゆく。(文末図表参照)

最初の寄稿は『國民文學』1915年3月号、「雲翳」(「1914年10月中旬」と記載あり)と「莫夜」(1914年11月下旬)という二篇の詩であった。

「雲翳」

地の物は皆、常ならぬ静けさに浸され、
大氣は、あやしく透きとほりうち淀めり。
不思議なる叫び聲、
空に聞こゆ。
聖火ぞ空に翻る。
不思議なる聖火かな、
さなり、空こそあまり澄みけれ、
燃えうつらんに處なく、
消え入るに隈もなし⁴⁰。

ニューヨークで、ブルックリン美術館の日本語助手を勤めていた竹友藻風(1891-1954)とともに、ホテルに滞在している野口に会いに行く。(長沼重隆『トラウベルを語る』東興社、1931年9月25日／「野口さんのこと」『日本詩人』1926年5月、40-43頁、など。拙著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』に詳述。)

40. 佐々木指月「雲翳」『國民文學』1915年3月、30頁。(再録／『郷愁』前掲、1-2頁。)引用は初出。

非常に緊張感のある感性で世界の現象を謳っている。彼の寄稿は、このような象徴主義詩の傾向が濃厚である。翌4月号には、詩「野火」他、「北米通信」が掲載された。1915年6月号には、「月夜」他三篇（「祈禱」「二階からおりてくる女」「電車から見た女」）の詩が掲載されているが、この同じ号には「最近の英詩壇（紹介）」として英文学者・山宮允が、1914年1月にロンドンでおこなわれた野口米次郎の「日本詩歌」に関する講演を詳しく報告している⁴¹。雑誌『國民文學』には、ベルクソンなどの西洋近代思想から万葉集などの日本の古典文学にいたるまで、様々な理論と解説が寄稿された。このような内容を同時代のアメリカで入手して日本語で読むことができたということは、指月にとって大きな意味があっただろう。

一冊の詩集を刊行することは指月にとって夢だったにちがいない。寄稿をはじめてわずか一年、1915年3月号から1916年3月号までに掲載された作品を再掲する形で、詩集『郷愁』（1916）が編纂されている。詩集のなかの、最後の詩篇「父の墓を夢見て」が、唯一書き下ろしの作品である。この詩集は、匣付き、天金加工（上部に金箔を転写する製本加工）がほどこされた高級感のある一冊であった。1927年頃には古本屋で高い値がついていたという。（2024年現在でも古本屋で僅かに見つけることができるが五万円以上の高値となっている。）

1916年2月の編集後記には、詩集『郷愁』が抒情詩社と国民文学者の共同出版で発行されることになったことや、佐々木指月の来歴などが紹介された。《遠く母国を離れて、初めて母国をより識り母国を愛慕している人の詩集として、同時に極度に東洋的な、芸術的な詩集》⁴²として、主幹の窪田空穂がこの詩集を強く推薦した。ただ、この詩集はその予告通りに刊行できなかつたらしく、2ヶ月後の1巻21号の「消息」にも、既に製本にとり掛かっている旨、紹介がある。《作者の愛する詩に似合はしい席を得させようと思ふところから、紙質體裁なども、出来るだけ注意を拂ひました。作者と、編集者である私とは出来上がる日を待ち抜いてをります》⁴³とある。指月も国外から赤入れや構成チェック等を熱心におこなっていたことが伺える。

どの程度、赤入れ修正をいれていたのだろうか。雑誌初出時からの改変は多くはないが、「いまし」と平仮名にしていたものを「^{いまし}汝」と漢字にしたり、「なく」を「啼く」とするなどの修正がある。また、カタカナであった文字を、漢字表記とカタカナのルビに変換している場合もいくつか見られる。たとえば、詩篇「春の太陽」で、初出が「ラビリンス」「^{ラビリンス}ハート」となっていたものを、刊行時には「迷路」「^{ハート}心」としている。詩篇「春

41. それは主に日本協会（Japan Society）のパンフレットから内容を読み、その後、アイルランドの詩人や多くの英文学で注目される人物の名前を配して解説したものであった。（山宮允「最近の英詩壇」『國民文學』1巻11号、1915年6月、82-84頁。）

42. 窪田空穂「消息」『國民文學』1巻19号、1916年2月、63頁。

43. 窪田空穂「消息」『國民文學』1巻21号、1916年4月、70頁。

の肌」で、初出が「シルヴァ」「ペエヴメント」「ダンス」となっていたものを、詩集では「銀」「敷石」「踊」と表記しているような点である。掲載の順番も、雑誌掲載の順序から少し変化させている。また、アメリカの現地を感じさせなければならない語り口調の詩篇においては、アメリカ式読み方のカタカナだけが残された。たとえば、「街角から――亀谷荻骨を送りて」などでは、「ストリート」、「ダウタウン」、「タキシ」、「スピイド」、「アウトマテツク」、「ポリスマン」と、現地の生きた言葉をそのまま使っている。

指月は日本語の古く美しい詩語にはかなりこだわりをもっていた。また一方でアメリカの風物の情感も大切にして詩を書いていたことも確かである。要するに、詩集『郷愁』は、詩ひとつひとつにも、製本にも、細部にまでこだわりをみせた一冊となっている。

4 移民地からの報告

佐々木指月の『國民文學』寄稿は詩の掲載がほとんどであるが、散文や通信にあたる文章も三回掲載されている。最初は1915年4月号掲載の「北米通信」。アメリカ社会の現地の様子を軽快な口調で紹介したもので、20年代に指月が人気を博すことになるメリケン言葉の随筆群の先駆けとして読むことができる。

二つ目の注目しておきたい散文としては、雑誌同人のアメリカ支部についての報告が掲載されていたことである。1916年7月号に、「十月會北米支部の記」と題して、北米支部員として五名（田中まつか、宮下孤羊、松下省三、清水月影、阿部謙二）の名前とそれぞれの生活と芸術についての簡単な紹介が掲載された。そのあとに、阿部の詩一篇、宮下の和歌四首、清水の和歌十首、それと指月自身の詩篇「歸路の幻」が掲載された。指月は、皆の生活と芸術をひとつおとり紹介したあとに、自分自身についても次のように紹介している。

（前略）私は、西洋人に云はせると、廿五才位にしか見えないさうです。そして誰れも二人の子のパパアとは思つてくれません。日露戦争の時軽重輪卒で生憎鐵砲玉の來るやうな處へは行く程の兵種でなかつたので名譽の凱旋を致しました。その時、廿五才でした。その後米國をころがつて歩いて、今シヤトル市にゐます。もうこゝも倦きたから、またどこぞへ行かうかと思つてゐます。本職は、木像と泥人形の細工人です。

私たちは一つ處へ落ち合つて、歌會でも開くやうな事は、ネバありません、そんなチャンスを得る事は、^{ママ}ポープレスです。どうせボカボンドの寄り集りで

すから。(以下略)⁴⁴

ネバ (never)、ポープレス (hopeless) など、カタカナ英語を故意に混在させながら、アメリカの大地を「ころがって」歩くヴァガボンド (vagabond / 放浪者、ごろつき) だと、自らを多少卑下したような雰囲気を書いている。

指月の詩だけをみれば、音律もゆたかで、優雅で情趣あふれる詩語を自在に用いる詩人であったが、そんな側面と同時に、仕事に追われて貧しく粗野に生活せざるをえない移民地を生きる放浪者としての側面を、移民地の仲間たちと並ぶ形で披露して見せていた。指月は次第にお金にならない詩作をはなれて散文随筆を多く書いて原稿料を稼ぐようになっていく。詩人としての真摯で純粋な側面を率直にみせる初期の散文やさまざまな活動記録は、大変貴重である。三つめの散文については、『國民文學』への寄稿の最後となるものであり、後述する。

次には、指月の詩が同時代詩人たちにどのように評価されていたのかについて、みていきたい。

5 三木露風と窪田空穂の指月の作品評

詩集『郷愁』の「序」は、三木露風と窪田空穂がそれぞれ書いている。窪田空穂は指月の詩については《何もいふ必要がない》、《同じ國語を語るところの同胞の鑑賞に任せて案じてゐられる》とし、主に佐々木指月の境遇や、北アメリカにおける十年の生活が《彫刻と禅と自己省察だけであつた》ことなどを、深い敬愛の念をこめて書いている⁴⁵。また、三木露風は、

(佐々木指月の詩は) 普通生活感情の一端を歌ふことにのみ満足はしてゐないやうである。氏は尠くも其の辿つてゐる道からして或高いものを表示しようとして居るのではあるまいか。即ち其の郷愁は單に望郷のやるせなさではなくしてはるかにもっとやるせない郷愁なのではなからうか。詩の目的は畢竟「或物」を表現するにある。事象以上の「或物」を喚び起すにある。春草のたわいもなく風に吹かるるがなぜにかなしいであらう。其れは故郷の崩れた築土のためにばかりではない。この「或物の世界」を感知する能力を『郷愁』一卷が表はしてゐるならば私は偕によるこびたいのである⁴⁶。

44. 佐々木指月「十月會北米支部の記」『國民文學』24号、1916年7月、74頁。

45. 窪田空穂「序」『郷愁』、15-18頁。

46. 三木露風「序」『郷愁』、3-4頁。

と、叙情ゆたかに指月の詩作品の本質を伝えようとした。露風の「序」は、上に引用したなかにもあらわれる「春草」をテーマに、象徴的な短い感想を書いたものだったといえる⁴⁷。

一方、雑誌『國民文學』のなかには、それぞれの詩作品に言及した、より長い詳細な評論を執筆寄稿している。つまり「序」でいう《或物の世界》の中身をより具体的に表そうとする批評がおこなわれた。「禅」を自らの本質として生きる指月独自の「やるせない郷愁」を具体的に説明しようとしていた。どのような評価だったのだろうか。

此詩集に収められた詩のすべては其材を、異國の生活と自然とに求めてある。しかし其作品から受ける感じは決して異國趣味とは思はれない。異國の風物は偶然の對象にはなつてゐるけれども、それを支配する詩人の感情は異邦の趣味に據つてゐないことを感ずるのである。

佐々木氏の歌ふ感情の背後には常に故國が横はつてゐる。それはあながちに思郷の懐ひを抱くといふばかりでなく、日本人として絶えず目ざめた情緒を持つてゐる。それは異なる民族の中に生活して或場合には孤峙せざるを得ない氏の境遇から自然に來つたものであらう。それが氏を内省へと導いたであらう。またそれが或時は氏をして是等の詩を書かしたであらう。そこに見出すものは我々に親しい情緒である。佐々木氏はたとへば、白罌粟の花にまちつた紅薔薇のやうに、その本來の情緒を變じないばかりでなく、其情緒の記號を一層あきらかに、一層増やして表はすのである⁴⁸。

指月の詩の背後にあるのは、故国に対する「目ざめた情緒」であり、日本人としての深い情緒である、と露風はみている。指月の詩情は、異質というより共感をもって捉えられるもので、新鮮さと濃度を感じさせられるということである。未知なる異國の風物や縁遠い情景が対象とされているのにもかかわらず、それを読む日本の読者は、自分のなかにあった情緒をさらに深みをもった形で突きつけられる、といているのである。三木露風は、「わが兒らへ」や「琥珀に染りて」などの、指月の子供をうたった詩についても褒めている。《眞摯な、善き律を以てうたはれてゐる》と評された「わが兒らへ」は、次のような作品である。

(前略)

子等よ、誰とて

47. 三木露風「序」『郷愁』、1-4頁。

48. 三木露風「佐々木指月氏の詩—『郷愁』を讀んで」『國民文學』27号、1916年11月、44頁。

いましたちのまことの故郷^{ふるさと}を知るものぞ。

木のまたに泣きゐしを拾ひきて

そだてしと云ひしは父のいつはり、

たよりなげなる面もちして

子心^{こころ}にも疑ひつ涙ぐみしいぢらしさ。

心安かれ

二人^{ふたり}とも、かく云ふ父の

まことの子なり。

(中略)

心強かれ、

我が子らよ、

いましたちの生れきしこの家は貧しけれど、

この父のいのちのかぎりは、

たとへ牛馬に身を落し

疲れ倒れて吐く舌は

路のほこりにまみるゝとも

いましたち二人をば必ず育て得さすべし。

また母とてもその通り

父が思にまさるとも劣りはせじ。

母の教に従へよ、

よく問ひて

よく覚えよ。

母の言葉を、よく習へよ、

血脈^{けちみやく}の國、日本をば忘るゝな。

されども、父はいましたちに

名を成し身を興せとは強ひて望まず、

たゞ、願はくば悪を作さゞれ

ああ、よく眠りたる二人の子かな⁴⁹。

率直で明快な詩であるが、深い情感と思想があることも感じられる。木の股で泣いていたのを拾ってきたのだ、と親に言われた子供が涙ぐむというくだりは、指月自身の幼少期の体験に因んでいる。彼は幼き日に「自分はどこからきたのだろうか」と親に問い、

49. 佐々木指月「わが兒らへ」『国民文学』1915年5月、34-36頁。(再録／『郷愁』前掲、26-30頁。) 引用は初出。

木の枝で拾ったと聞かされて悩んだ経験があり、のちにニューヨークの弟子たちに英語で語っている。多くの子供が不安に駆られるこの問いについて、《これは門である、禅の入り口である。(It is a gate, an entrance to Zen.)》⁵⁰と指月は弟子たちに語っていた。実際、禅の有名な公案のひとつが「父母未生以前の本来の面目」であり、指月も二〇歳のときに初めて師の宗活から与えられたのがこの問いであった⁵¹。詩篇「わが兒らへ」のなかでは、父は子供たちを不安や難問に陥らせることなく、《まことの子なり》と深い慈愛で包み込んでいる。

露風は、この詩について《佐々木氏が母國に對して抱く感情は隨所に看ることが出来るが、それは蓄に、かりそめの詠懐ばかりではなくしてかなり深い、大きい聲となつて現はれてゐる。》と評した⁵²。そして、この詩句のなかに、《日本がさながら叫んでゐるやうに思う》、《國語に對する愛、國語を通じての更に大きな愛》を感じると述べている⁵³。また同様に、詩篇「父の墓を夢見て」についても《恰も懺悔し、祈聽する人の如き、眞摯な、恭敬な、そして熱心な態度を以てうたはれてゐる》と、人としての良心と智力に感動し、《内部生活に生きやうとする眞の讓遜勇氣を語る》詩人の姿をみている⁵⁴。

さらに三木露風は「郷愁」の言葉を肉親の住む故郷日本への思いと、それを超える新たなものとの、次のようにふたつにわけて深化させて捉えていく。少し長くなるが露風の批評を引用したい。

此詩集に題名されたところの「郷愁」といふ言葉は二色の意を持つてゐると思はれる。その一は云ふまでもなく日本に對する思郷の念である。ふるさとの家の籬まがきの柳の葉を戀ひ、東京のそば湯の情趣に懷舊の情を寄せ、更に唯獨り故郷に老いて已れの歸國を待てる祖母をなげく、その詠懐である。われわれの肉身が有する郷土——それに對する愁である。しかし、更に「室を出でて」のなかに新たなるものを歌う。(中略)こゝに於て、國土そのものは前述のものとは異つて全然別個の内容と光彩とをもつ。それは最早肉身の郷土を指さない。そ

50. [When I was a child, I asked my father where I came from. My mother had told me she had picked me up from somewhere and carried me into the house. I worried, so I asked my father. "I found you in that tree branch." Everyone has this question. It is a gate, an entrance to Zen.] Sasaki Shigetsu, Michael Hotz ed. *Holding the Lotus to the Rock: the Auto biography of Sokei-an, America's First Zen Master*, Four Walls Eight Windows: NY, 2002, p.23. (この著作の翻訳は、現在、末村正代、堀まどかの共訳で『光』誌に連載中である。)

51. Sasaki Shigetsu, Michael Hotz ed. *Holding the Lotus to the Rock*, p.69.

52. 三木露風「佐々木指月氏の詩——『郷愁』を讀んで」『國民文學』27号、1916年11月、45頁。

53. 同前。

54. 同前、46頁。

れははるかに全たい渴ける者の泉であり、智慧の源である國土である。その國土をわれわれは何處に求めるか。大空は深淵のやうに力と、和らぎとをもつてのぞんでゐる。それを感じずる者は單純の中にも、「際限なきもの」を味ふ。それ故に氏は歌ふ「ためらはず大空を眺めよ」と。ためらはぬ視る者の心に其國土は宿るのであらう。氏はその冗煩なる思慮と、壓迫する空氣との室を出でて、ふと大空の玲瓏たる光に眼をとどめた。

汝が故郷は、かしこに、茜する杜蔭に
今、飛びゆく彼の鳥の跡を逐へよ。

即、氏の郷愁は二重の意味を以て歌はれてゐる。一は肉身の郷土、一は心靈の國。さうして是等の心的傾向が、氏を禪定へと導いてゐるのを見る。「雲翳」「天を背景として」「望」等はその禪定的氣分のあふれた詩である⁵⁵。

指月の郷愁とは、肉親の住む故郷の地から次元を越えて《心靈の國》、《智慧の源》となる魂の故郷のことを指しているというのである。「禪定」(ぜんじょう)とは仏教用語で、精神を集中して三昧に入り真理を悟ることをいう。坐禅して絶対の境地、無念無想の境地に入ることを指す。これに「えくすたしい」とのルビを振っていることに注目したい。エクスタシーは恍惚やうっとり和我を忘れた状況になることを一般的には指すので、坐禅とも「禪定」とも異なるといえるが、露風は詩人の感性からルビをつけたのだろう。当時の芸術思潮を考えない場合には、指月の「禪定」をエクスタシーと捉えていることは皮肉や批判にも受け取られかねないが、露風のなかでは皮肉ではなかったのだろう。露風は指月の詩の叙情的「郷愁」のなかに「禪定」にみちびかれていく詩人の姿を見て、当世風の超越主義的感覚ともつながるものだと捉えたのであらう。「雲翳」は先に引用した。「望」は、幼子が箱を開け閉めして遊ぶ様を凝視し慈しみ、その先に世界の神秘と普遍的な尊さに導いていく詩篇である。これらの《禪定的氣分》をもつ指月の詩篇は、《詩人の内部の直観がもの云ふが故に、これを讀めば即ちその心が感染する》と露風は述べた⁵⁶。ここでは、露風が解説している詩篇「室を出でて」の全体を引用したい。

「室より出でて」
樹樹はその百千の緑の舌をそよがして、
暮れ匂ふ日の光をば味へり。
今日を終の日の如くせはしげに、
己が身を分け、風のまにまに飛びゆく

55. 同前、46-47頁。

56. 同前、48頁。

たんぽぽ。
何をかは求めんと、一つ處に集りて
渦を巻く蚊の群よ。
一つ處に集りて童の群は
泣きさけびつつ戯むる。
啼く鳥よ、啼く鳥よ、そは沈みゆく
日のひびきか、
汝がとまれる電線は汝が聲に共鳴し
非情のものいまだ曾て歌はぬ歌を
うたふなり。
ああ我が目、何を見るぞ、
何を見んとてともすれば胸のうちはば
窺ふぞ。
ここには誰も棲み居らず、
ただ傷つきし幻と、黒き繩にて縛られし
この智慧と、
智慧をば守るこの我と、それのみ。
安かれよ我が目よ、
ためらはず大空を眺めよ、
まのあたり汝が見るそれは、汝が眞の
國土なり。
汝が故郷は、かしこに、茜する杜蔭に
今、飛びゆく彼の鳥の跡を逐へよ⁵⁷。

樹木、たんぽぽの綿毛、渦を巻く蚊、子供たち、鳥たち、大空。そこでの焦点は、その自然界を眺める自らの目であり、智慧を守る「我」、それのみである。巷の現象を超え、時を超えて、真空空間に佇むかのような強烈に強度のある緊張感がある。自らの目に映るものをためらうことなく眼差して、今この世界こそが真正のわが國土なのだ、というのである。これは、「見性」（自らに根源的にそなわる本性を見極めること）や悟りの境地、つまり指月なりの「本質直観」を表現したものではないだろうか。

三木露風は「日本」とか自分の家族とかいった狭義の懐かしさではなく、禪者としての宇宙そのものを恋い懐かしむ詩人の哲学的情念と境地だと評価した。また、指月の律

57. 佐々木指月「室を出でて」『國民文學』1915年11月、73-74頁。(再録／『郷愁』前掲、83-86頁。) 引用は再録から。初出「覗ふ」→再録「窺ふ」、「ああ」→「ああ」などの変更がある。

調には《ヨハネの黙思録に於ける豫兆的》⁵⁸な表現の特質があるとも書いている。

じつは、露風の自筆年譜によれば、彼自身も1917年に一時期、参禅していたようである。鎌倉円覚寺に行き、神尾光臣（1855-1927）、政治家の野田卯太郎（1853-1927）、そして指月の親友の窪田空穂らとともに、釈宗演のもとに参禅して禅学を研究したと自称しているのである。本人曰くだが、釈宗演は露風が公案に通過し悟りを開いたことを認めたとのことである⁵⁹。

窪田空穂も指月の作品を高く評価し、そこに「禅」の影響をみていた。指月の没後のことになるが、指月の詩の表現技法を誉めて以下のように回想している。

指月が何時このような表現技法を身につけたのか、私は見当もつかなかった。彼は生来歌好きであつたと見え、それと口には出さなかつたが、好んで歌人に接近していた。無論歌誌歌書は読んでおり、労苦して自得したものと思われる。しかし、詩の聯と聯の続きの上に、信念を持つた、落ちついでる起伏・緩急は、私には指月独自のものに思われた。これに依る所があるとすれば、禅書から暗示を得たのではないかと想像した⁶⁰。

このように指月と同じ時代をいきた詩人たちは、彼の作品に「禅」を読み取っているのである。大正期の象徴主義文学の思潮のなかで、禅やインド哲学、宗教性が注目されていたこともあるが、禅が詩人佐々木指月の属性として外せないものであったことは事実であろう。

6 「國民文學」への最後の寄稿

指月が『國民文學』に寄稿した最後の原稿は、「ニューヨークより」と題した日記随筆、散文である⁶¹。これは窪田空穂への私信のような体裁で、指月本人としては掲載を意図したものではなかったかもしれない。あるいは空穂がアメリカ通信として掲載するだろ

58. 三木露風「佐々木指月氏の詩—『郷愁』を讀んで」前掲、47頁。

59. 三木露風『我が歩める道』（厚生閣書店、1928年8月）、『三木露風全集・第二卷』日本図書センター、1973年7月20日、299頁。《鎌倉円覚寺に行き、故神尾光臣將軍、故野田卯太郎、窪田空穂等と共に、故釈宗演師につきて参禅し、禅学を研究した。宗演師は、露風が考案に通過し所謂悟りを開きたることを賞した。此年読売新聞に「トラピスト僧と愛の力」を書き、大阪朝日新聞に「民謡の復興」を書き、「時事新報」に詩論を発表した。》

60. 窪田空穂「佐々木指月という人〈続〉」『短歌研究』15(8)、1958年、31頁。（再録／「佐々木指月」『窪田空穂全集』11巻。）

61. 佐々木指月「ニューヨークより」『國民文學』31号、1917年2月、53-56頁。

うことを十分に意識して書いたかもしれない。

この執筆では、まずシアトルからニューヨークに移動したあと、彫刻工人として工場
で働くようになった生活の様子が報告されている。ニューヨークの彫刻工人が組合組織
になっていること、シアトルからの紹介状を持って訪問したミラー氏の所で、日本の象
牙彫刻の工場をもつ茂木氏を紹介されたこと。茂木の工場では、同じく高村光雲に学ん
だ兄弟子・前島交吉が《パリからアメリカへ流れ込んで》職工として働いていたこと。《世
話好きな江戸っ子》の茂木とはすぐに意気投合したこと。十五の時から研鑽を積んでき
た指月にとっては木彫も象牙彫刻もお手のもので、《魂が這入って》いる指月の道具（彫
刻刀）や彼の技術力と勢いに、茂木がすっかり惚れ込んでしまったこと。よりよい給与
をもとめてイタリア人の彫刻工場に移動したが、初日に他の工具の2倍以上の速度で彫
刻を完成させた指月は、工場の彫刻師長から睨まれて衝突してしまったこと。そのため、
かえって彫刻師長を追い出すことになってしまい、他の工具たちからは思いがけなく《勇
敢だ》《よくやつて呉れた》と尊敬を受けることになったということ。つまり、彫刻の
高い技術力と豪快な性格とコミュニケーション能力の高さで、怯むことなくニューヨー
クに定着しはじめた佐々木指月の様子が詳細に報告されている。

報告の最後には、画家の「川島」（川島理一郎：1886-1971）と一緒に彼のスタジオで
美術家として仕事をする身になったことを報告している。（指月より4歳若い川島は、
1905年に19歳で渡米してニューヨークやパリの美術学校で絵画を学んだ。パリでは藤
田嗣治やピカソやレジェらと交流していたが、このころニューヨークに戻ってきてい
た。）

わたしは今日から、川島といふ日本の畫家、ニューヨークで白人の間に一寸知
られてゐる男と一緒に、彼のスチュージオで仕事をする身となつた。イタリー
人の工場はいつでも歸れるやうにして、惜しまれて昨日實は暇を取つた。今日
からは私が私の主人で、獨立で仕事をする。川島君の畫室は便宜上私が借り、
そこに泊り、川島君が食べさしてくれ、日本の妻子への送金を引受けてくれた。
仕事はある。昨日までは職工、今日からは美術家。但し當分貧乏だらうと思ふ。
...⁶²

新進芸術家たちの坩堝ニューヨークで、芸術家として生きようと挑戦する指月の姿が日
本の友に報告されているのである。生活費を稼ぐための職工（賃金労働）をやめ、芸術
に真摯に打ち込もうとしていた。このような佐々木指月の姿は従来には知られていな
かったことである。そして、芸術家として一か八かの挑戦をするさなかでも、家族への

62. 佐々木指月「ニューヨークより」『國民文學』前掲、56頁。

仕送りを忘れていないことにも胸をうたれる。彼は《一日も早く日本に歸つて、自分を埋める墓の前で、私は私の仕事、畫、詩、彫刻をして死にたい》とも、《僕は脱線するやうな事はないから安心してゐてくれ。》とも書いている⁶³。

指月と川島理一郎が、この頃しばらく同じベッドで寝起きを共にしていたことは、1927年の『中央美術』に掲載された随筆のなかでも次のように触れられる。

鑿と玄能を擔いで、アメリカのあちらこちらを經めぐつて歩いたわたしは、十年目にニューヨークの都へと入り込んだ。その頃、その土地にゐた日本人の美術家には、今の川島理一郎君などがゐて、この理いちやんと、わたしはしばらく、同じベッドで寝たものだ。理いちやんの夜具はとても重くつて、それにまた、ベッドには骨が出てゐて寝るにも寝られず、とうとうわたしは逃げ出した。理いちやんは小男のくせに、えらく寝力のある人であつた⁶⁴。

アメリカ西海岸では差別と労働のため彫刻や美術の芸術活動ができず、必然的に詩作に命をかけようとしていた指月。彼は妻子を帰国させてニューヨークに移り、川島理一郎と共にアトリエを得て、芸術創作活動に打ち込もうとした時期もあつたのである。『國民文學』への最後の寄稿である随筆「ニューヨークより」は、次のように締め括られた。

僕は何を考へても、何をしても、そのまゝで天地に通ずる三昧だと思ふ。だから一つ事を考へたい、一つの事をしたい、一つ處に集めたい。散らかつて居るから三度唱へる、唱へれば集まつて來る、集まれば暢びて行く、暢れば流れて行く、流れれば光を發^ミする⁶⁵。

禅者としての境地が、のびやかに言葉になっていく。彼の発想も創作も行動も、すべて禅の思想に彩られていた。彼はニューヨークのボヘミアン芸術家たちが集まるグリニッジヴィレッジの生活のなかでも、モダニズム芸術の享樂的世界のなかでも、どこにいても何をしても、自分を失うことなく「三昧」を思っていたのだろうと想像される。彼の世界観や詩的世界が溢れてくるような詩的な散文である。この言葉を最後に、彼の『國民文學』への寄稿は終わった。

ただ、『國民文學』には1917年2月号の寄稿までしか見られないが、『早稲田文学』

63. 佐々木指月「ニューヨークより」『國民文學』前掲、56頁。

64. 佐々木指月「アメリカ美術贗作座談」『中央美術』13(9)、142号、1927年9月、34頁。

65. 佐々木指月「ニューヨークより」前掲、56頁。

1917年5月号には3篇の詩が掲載されている⁶⁶。佐々木指月の文章を掲載する雑誌の幅が広がりつつあったのである。

おわりに

本稿では、佐々木指月の『國民文學』への寄稿とそれをもとにした詩集『郷愁』の詩とその評価についてみてきた。『國民文學』に定期的に指月の詩が掲載されることは、同時代の日本の文壇事情と世界の文芸傾向を知るために佐々木指月にとって重要であった。また日本の読者にとってもアメリカの事情を垣間見る契機になっていたと思われる。異国に暮らす禅者・指月から新しく且つ深い情感を得ていた様子が伺える。多くの同時代の評者たちが、アメリカにいる彼の詩の奥に、「禅」の思想をとらえていた。また、「十月會北米支部の記」の例にみられるように、移民地の文芸に関心をもつ生活者たちにとっても、指月を介して日本文壇とつながることは救いであり誇りであり重要であったと思われる。そのような日本と移民地との文壇の交流の様子が指月の『國民文學』への一連の寄稿から読み取ることができる。

当時そうそうたる文芸家たちが寄稿した雑誌『國民文學』に継続して詩が掲載されたことは、大正期の日本の文壇で指月が詩人として知られつつあったことの証しである。1916(大正5)年6月の『早稲田文学』の「文芸界一覧」には、「佐々木指月著詩集『郷愁』出づ」と紹介された⁶⁷。詩集の刊行後にも指月は継続して詩を寄稿していたが、それは他の雑誌などでも文学動向として記載され注目された。たとえば『早稲田文学』の「大正六年文芸界一覧」の2月には、次のように紹介された。

指月の『金の鱗』(國民文学) 碎花の『エミール・ヴェルハーレン詩草』(詩人)
犀星の『東京の大街道』(感情) 朔太郎の『見知らぬ犬』(同上) 介春の『魚群』
(詩歌) 柴舟の『われの價』(同上) 哀果の『こがらし』(アラ、ギ) 茂吉の『赤彦に酔ふ』(同上) などの詩歌出づ⁶⁸。

富田碎花、室生犀星、萩原朔太郎、斎藤茂吉など、詩史のなかでもすぐれて有名な詩人たちに混じって、指月の詩一篇の掲載がとりあげられていることは注目に値する。

円覚寺の釈宗演の命をうけて渡米した釈宗活に従って渡米した佐々木指月は、高村光

66. 『早稲田文学』(第二期、138号) 1917年5月号には、「紐育にて」(2月)「斎場」(1月)「夜のしめり」(1916年12月)の3篇が掲載されている。(『早稲田文学』第二期138号、1917年5月号、53-54頁。)

67. 「大正五年文芸界一覧」『早稲田文学』(第二期、135号)、1917年2月、15頁。

68. 「大正六年文芸界一覧」『早稲田文学』(第二期、147号)、1918年2月、9頁。

雲に彫刻を学んだ芸術家であり、サンフランシスコでも油絵を学ぼうとしたが、家族を養いながらの貧乏生活のなかで、詩に移行せざるをえなかった。『國民文學』誌上という芸術の発表の場を得たことは、彼にとってどれほど重要で心を尽くしたことだったのか。どれほどの孤独のなかで打ち込んだものだったのか、想像するに余りある。彼は1922年に当時のことについて次のように書いている。長くなるが引用しておきたい。

寝てもさめても暇のあるたびに詩作した。さうしてその後の十年は一日の如く過ぎて行つた。私の詩の境は、幾度か變つた。幾度か、後もどりしては、前に歩んだ道をまた進んだ。然し私はその間、たつた獨り、自分の道を開いて進んだ。それは實際さうするより外にしかたはなかった。日本から雑誌などが來るたびに、私は日本の詩人たちが作つてゐる詩を見た。だが、私には何の共鳴も起らなかつた。それは、住む環境を異にし、物の考へ方を別にし、物の見方や味ひかたを全然別々にして來た私には、どうすることも出來ない悲みであつたには違ひない。けれども、私は、強ひてそれに共鳴しようと云ふ心がけも起さなかつた。寧ろ私は、たゞひたすらに自分の道を淋しく歩いた。(中略)けれども、こゝにたつたひとつ云ひのがすことの出來ないことがある。それは何んだと云ふと、私の詩のなかには「禪」の感化があることだ。「禪」と云うと、日本の人たちは、それがあんまり耳に古く聞こえるから、深い注意も起さずにある。それは、ジェームスのプラクマテズムを云々し、ホイットマンのチャンツ、デモクラチックを口にする人があつても「禪」と云へば、何のこととも思はずにある人が多い。だが、私にとつては、それは、ニイチェよりもベルグソンよりも、またマリネットテの思想よりも深く力強く、さうしてこまかく、また不斷に新しい思想である。虚無と云ふ言葉に驚く人があつても、私はそれは笑つてゐる。なぜならば「禪」は、徹底空を基礎としてゐるからである。畢竟空を根底としてゐるからである。レニンのボルシエヴィズムもそのなかにある。ウイルソンのリーグ、オブ、ネーションもそのなかにある。印度から、支那に傳はり、支那から日本へ傳はつたこの「禪」が、なぜ今の日本人から忘れられてゐるかは、全く私にはわからない問題である。いや、よくわかつてゐる。西洋のものだけが尊いと思つてゐる日本人にこの純東洋的の大思想がわからないのも無理はない。私は、ほんとに熱狂して、いつもかう云つて友人の反感を買ふ程に、それに深く動かされてゐる、だから私の詩には、その色彩は最もあざやかに見えてゐるにちがひない⁶⁹。

69. 佐々木指月「自序」『亞米利加夜話』日本評論社、1922年1月10日、3-5頁

日本の詩壇に詩を送りながらも、日本の詩壇の傾向に同調も共感もできない孤独な詩人の姿が伺える。日本詩壇が国外のイデオロギーや流行の思想を矢継ぎ早に受容していく様を横目でみながらも、そこに迎合しない姿が見える。彼は禅に本気で熱狂し、それを芸術に昇華させようとしていた。狭義の故郷ではなく、まのあたりに眼前で掴む禅定の世界への「郷愁」の思いを、彼は『國民文學』に書き送り、さらに詩集『郷愁』刊行のなかで表現した。本稿では彼の「禅」的な作品の全てを見ることができなかったが、同時代評を中心に作品をいくつか紹介した。

さまざまな芸術表現に挑戦した指月だが、すべてその根源的課題は「禅」であり、深い人間の孤独にたいする悲哀と慈愛、人種や国境を越えた人間愛である。指月の放浪性、越境性、分別を超える（無分別）あり方そのものも、まさしく「禅」的な生き様であったともいえる。また自らの体得した「直観」を人々に芸術表現を通して伝えることを自らの命としていたことも事実である。また日本の従来「禅」の立場を超えるもの、既存の枠組みを離れるものでもあった。これらについては本稿のなかでは論証しきれないが、今後の課題として述べておきたい。

本稿の最後に、彫刻家としての彼の誇りであった鑿を日々眺める詩について紹介して終わりたい。これは詩集『郷愁』の刊行後に、1916年9月の『國民文學』に掲載された詩篇である。三木露風がいった《一は肉身の郷土、一は心靈の國》のどちらにも当てはまらない詩だと思うが、移民地で生活に追われながらも、禅を心に定めながらも、芸術家としての才能と情熱を持って余し、毎夜、鑿にわが心を眺めている姿が胸を打つ。

「鑿の心」

午後五時は
工女等の、沈黙のうちに來りぬ
耳にうれしき汽笛の音、
急ぎ道具を形づけて
歸る仕度もそこそこに戸口にすれば
ふと、氣にかかる物忘れ
思ひ出さんと佇めば何もなし
歩み出せばまた胸に
無始が知らせる物忘れ。

さなり、さなり
我が鑿に顔を見せるを忘れてたり、
立ち戻り、
道具匣の、どの引出しも皆あけて

ならべる鑿に笑顔見せ
『おやすみ』と、云ひて別るゝ淋しさや。

日毎の我れの習ひとて
工女たちはみて笑へど
日本から苦樂をば共にして來た
この道具、
はがね
鋼のなかに心あり
かりそめの、たつた一夜の別れをも
惜みて我れを呼び返し
我が顔、見ると知らざるか⁷⁰。

雑誌『國民文學』への寄稿と、詩集『郷愁』への再掲

詩のタイトル、散文のタイトル	巻号数	刊行年月
雲翳／莫夜	1 (8)	1915.3
野火／贖罪／赤い猫	1 (9)	1915.4
「北米通信」(散文)	1 (9)	1915.4
我が子等へ／「グリヅルピツキ」より	1 (10)	1915.5
月夜／祈祷／二階からおりてくる女／電車から見た女	1 (11)	1915.6
天を背景として／ゆひわた／石／明／我が病室は	1 (12)	1915.7
蟲／春の太陽／春の肌／途上にて	1 (13)	1915.8
彫像／あさあけ／烏蛇／ピクニツテーブル／徒歩旅客の歌へる／	1 (14)	1915.9
街角から(亀谷荻骨を送りて)／夜となり／貯水池／腦雲	1 (15)	1915.10.
朝の韻律／虞美人草に伏して／室より出でて／水をやつてゐる女／身を離るる日	1 (16)	1915.11
*望／*最後の言葉／*海の日の暮れ方／*街燈／*朝露に包まれて	1 (17)	1915.12
宿り草／肘枕して／いづこ／鶏鳴	1 (18)	1916.1
窓の灯／ダンサアの幻／薪割り／君を送りて	1 (19)	1916.2
湖畔集(小暗きなかに／秋のなごり／電車を待つ間／うす煙／** 杭／海鳥／そぼろ雨／朝月夜／木場の小屋)	20	1916.3
一元の湖を渡りて／燕京カフェ	21	1916.4
菱花集(烟突／帰路の幻／雪除け／ホワイト・スタッキング／春は来るに)	22	1916.5
子追ひ鳥／一つ岩／金の小鈴／	23	1916.6

70. 佐々木指月「鑿の心」『國民文學』26号、1916年9月、30頁。

「北米支部の記」(散文)	24	1916.7
新緑集(朧月/雀よ/残る灯/金とと)	25	1916.8
鑿の心/三つの湖水/水	26	1916.9
(指月の寄稿なし) / 三木露風「佐々木指月氏の詩」(評論)	27	1916.11
(指月の寄稿なし)	28	1916.12
(29号は存在しない。)	29	—
秋風/海を眺めて/橋の下から見た女/今日ははや/可愛ゆきもの	30	1917.1
金の鱗(ビュルデング/金の鱗)	31	1917.2
「ニューヨークより」(随筆)	31	1917.2

太字は、詩集『郷愁』に再録されたもの。

*1 卷17号は、現存雑誌が確認できないが、刊行された詩集『郷愁』から鑑みて、この5篇の詩が掲載されていたはずである。

** 詩集刊行時には、「杭」が「杙」の字に改められている。

ほり・まどか
(大阪公立大学)